
リリカルなのは 過去と今と未来と

ポニー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リリカルなのは 過去と今と未来と

【Nコード】

N9837N

【作者名】

ポニー

【あらすじ】

なのはが死んでから20数年……

あの日の誓いと、あの日の想いと、あの日の後悔を胸に……

ユーノ・スクライアは過去に降り立つ!!

リリカルなのは 過去と今と未来と プロローグ

なのはが亡くなってから1ヶ月が過ぎ去った……

21歳のなのはの誕生日の時に結婚しようとどちらからからも無く言った。

それが可笑しくってお互い笑い会い、ヴィヴィオが嬉しそうに笑って……

其処には確かな幸せがあった。

だけど、結婚式、当日、なのはがテロにより暗殺された……

今でも夢に見る……

血染めのウエディングドレス……

呆然としてなのはを抱きかかえる自分、泣き縋るヴィヴィオ、騒然とする周り……

そして、あの時から僕の時間は止まっている……

僕は、なのはの葬儀が済み、悲しみから逃げる様に放浪の旅に出た。

僕は……逃げたのだ……

なのはの死と言う現実から……

僕自身の悲しみから……

逃避した……

そんな時だった……

マリー……アリシア・ツォン・スターゲイザーとであったのは……

彼女は次元漂流者だった……

その力は老いている筈なのに強く、特にサイブレードを使った剣技は正に神業の一言に尽きた……

僕は彼女から剣技を学んだ。

ハッキリ言えば僕には才能なんて欠片も無かった……

それでも僕は師匠からは一本も取る事が出来ず、ボコボコに叩きの

めされた。

彼女に弟子入りしてから一年が過ぎた……

何とかコンバーター（増幅器）無しでサイブレードを維持する事が出来た。

この感じは魔法を使う時、そう、シールド系の魔法を使う時と感覚が似ている事に気が付いたのだ。

より硬く、より強靱に、より効率よく、より早くと……

其処に刃となるよう指向性を持たせる事をプラスしてやればサイブレードの刃が出来上がった。

師匠にそれを見せた時は大変驚いていた。

何故なら、コンバーター無しでサイブレードの刃を出すのは並大抵ではないらしく、自分の世界でも数人いる位だそうだ……

そして僕は師匠の下で10年間訓練に励んだ。

そして、師匠が他界するその日、師匠の本名と師匠のサイブレードを譲り受けた。

僕は材料を集め、師匠のサイブレードに僕のこれまで培ってきた魔法理論とデバイス技術の総力を結集し、誕生したのがインテリジェントデバイス……

『スターゲイザー』

だ……

そして、月日は流れ、10年が経った……

僕はある人物からの依頼で遺跡を調査している時だった。

碑石に刻まれた古代ベルカ文字で書かれた文字を読み上げた時から
僕の時間と世界は一変した……

『汝、失われた思いと時間があるならば願え』

と……

光から抜け出すと僕は5歳の頃の自分になっていた……

文字通り、世界と時間は一変したのだ……

スターゲイザーも僕について来た……

師匠の形見であり、僕の相棒が……

現状を理解した僕は決断する。

今度こそなのはを救うと……

諦めかけた思いは過去に……

小さな自分に宿って蘇った……

リリカルなのは 過去と今と未来と 1話

過去に舞い戻ってから5年の月日が経過した。

いきなり39歳から5歳になってしまい正直戸惑ったが自分に今何
が出来なのかを把握する為、スターゲイザーを起動させた。

「スターゲイザー……セットアップ!!」

『了解、マスター』

スターゲイザーは懐中時計からサイブレードに変形、僕の服もバリ
アジャケットになる。

バリアジャケットはズボンとマント以外は変化が無い……

昔のバリアジャケットのズボンが長ズボンになった事とマントにフ
ードがついた位の変化だ。

「ハアッ!!」

僕は精神力と魔力を混合させる。

そして……刃を形成する……

刃は僕の魔力光と同じ翡翠色が辺りを照らす。

「……刃を形成するのに0.1秒も遅くなっている……通常機動では問題無いけど突発的な戦闘での高速機動に支障がでるな……」

次にサイブレードを展開しながらの魔法行使を試みた。

「ヤッパリ……ブレードの出力が下がってる……精神力と魔力量が5歳だから仕方ないと言えば仕方ないけど……とてもじゃないけど実戦では耐えられない……」

更に僕にとって致命的だったのが5歳に戻った事による身体能力の全体的な低下だった。

こればかりは如何しようもない。

そう割り切り、始めに体力づくりから始めた。

正直、地味な筋トレの反復な為、正直辛い。

どんなに技術が優れていても体が其れを表現できないでは話にならない。

そして、僕は体に合ったサイブレードの振るい方を思考する。

「もう少し身長と体力と筋力があればな……」

僕の愚痴にスターゲイザーが語りかける。

『マスター……無い物強請りをした所で得られる物はありません……なら、今ある物で何とかするしか無いです……』

「解ってる……解ってるよ……だけど、ジェイダイトブレードが1発も撃てないのが致命的だよ……」

僕のボヤキにスターゲイザーの音声も暗くなる。

『マスターの奥義にして最強の技でマスターの代名詞ですからね……』

そう、なのはにスターライトブレイカーと言う代名詞があるように僕にも硬玉剣の名を冠した代名詞が存在する……

放てばなのはのスターライトブレイカーexにすら届くと自負している。

流石にスターライトブレイカーex-fbには届かないけど……

兎に角、体力、筋力づくりと剣技の劣化を防ぐ為の剣術の型の練習を繰り返した。

そんな事を繰り返して、5年が経過した訳だけど……

そう、あの事件が起ころうとしていた。

僕となのはとの初めての出会いにして、全ての始まり……

ジュエルシード事件が。

僕はレイジングハートを見つけ出してから遺跡の調査を開始した。

案の定、ジュエルシードを全て見つける事が出来た。

そして、歴史通り輸送艇はプレシア・テストロッサに襲撃、ジェエルシードは地球の海鳴市にばら撒かれた。

「それじゃスターゲイザー、レイジングハート、行こうか？」

『ハイ、マスター』

『……ハイ、マスター……』

スターゲイザーは簡潔に答えたが、レイジングハートは不満な様子

で答えた。

「レイジングハート？」

僕がレイジングハートに語りかけるとレイジングハートは愚痴りながら答えた。

『いえ……唯、スターゲイザーが羨ましいと思っただけです……私なんかジェエルシード格納庫に成り下がってますから……』

コレばかりは如何しようも無い。

僕の戦闘スタイルはレイジングハートのスタイルとは全然違う。

レイジングハートは砲撃戦専門のデバイスと言っても過言ではない。

僕の戦闘スタイルはサイブレードによる接近戦と僕の得意な補助魔法による戦闘が主体な訳で……

かみ合わないのだ。如何しても。

自然とレイジングハートは倉庫代わりになるしか無い訳だけど……

『不貞腐れるな。レイジングハート、お前にも何時か良い主にめぐり合う』

スターゲイザーは慰めの言葉をレイジングハートに語りかけた。

『スターゲイザーは良いですよ……自分を全開に使ってくれる人がいるじゃないですか……』

そんなこんなで地球に降り立ち、ジェエルシードの回収を始めてから5個の回収が完了した。

そして、今晚のはずだ……フェイトとアルフと出会うのは……

僕がそう考えながら6個目のジェエルシードを回収しようとした時だった……

『マスター……』

スターゲイザーが呟く様に言う。

「……ああ、来たか……フェイト……アルフ……」

僕も解っていたとばかりに呟く。

『何ですか？ 二人して？ ……！？ マスター別の別方向から魔力を感じ！！』

レイジングハートも気が付いたみたいだ。

来たか……フェイト！ アルフ！

その瞬間、金色の魔弾が5つ、僕に襲い掛かった。

僕はスターゲイザーを素早く抜き放ち、即座にブレードを展開、金色に輝き襲い来る魔弾を叩き落とす。

制御を失い、弾き返された魔弾は一つ目と三つ目は地面に激突して爆散、二つ目と四つ目は術者に向けて打ち返し、最後の五つ目は夜空の彼方へと消えていく。

制御から離れた魔弾は自然消滅した。

僕は自然とフェイト達が来た方角に視線をやる。

其処には、金色の髪を月夜に照らしながら輝かせる。黒いバリアジヤケツト姿の少女と、

赤みがかった髪をした人型の形態の使い魔がいた。

「2つのインテリジェントデバイスを持つ翡翠色の魔力光……そして、翡翠色の剣……彼方も魔導師？」

「そう言う君も魔導師かい？　行き成り砲撃魔法とは……」

フェイトの言葉に僕も返礼して聞き返す。

どうも違和感がある……

向こうは僕の事を知らない、でも僕は彼女達の事を良く知っている……

嗚呼……なのはと会うとこの違和感は酷い事になるのだろうか……

そして、僕はなのはを巻き込む事になる……

口では巻き込みたくない。普通の生活を送って欲しいと願いながらも心では、

なのはに会いたい、なのはを抱きしめた、なのはに溺れたい自分がいる訳で……

思考の海にドップリ浸かっているとまたもや魔弾が飛んでくる。

僕はサイブレードで全弾、弾き返しながら思考の海から引き戻される。

啞然としながら呟くフェイト。

「……そんな……私の攻撃を見向きもしないで全弾叩きおとした……」

アルフも気を引き締める様フェイトに諭す。

「フェイト!! コイツ、強い!! 隙がある様で全然無い!! 私がおフェンスに回る!!」

フェイトも頷きながらバルディッシュを構えなおす。

僕もサイブレードを構える。

「ッ!!」

アルフは一気に加速し僕に襲い掛かる。

僕は無言のまま、アルフの攻撃をかわし、サイブレードを下から上へと振り上げる。

翡翠色の刃はアルフの顎に当たり、アルフを仰け反らせる。

「ゾア！！」

悶絶するアルフに僕は袈裟懸け、逆袈裟、鳩尾に突きを連続で叩き込みバインドで縛り上げる。

先ずは一人！

そう思い、フェイトを見るとデカイ魔法の発射体勢に入っていた。

（プラスマスマッシャー！？　だけど、魔力量は少ないし、術式構成も甘い。コレなら回避が十分可能だ！！）

そう思い、回避しようとした時だった……

僕の感知センサーに新たな侵入者を捕らえた。

（！？　侵入者！？　僕の張った結界に！？　誰が！？）

其処に目を向けると女の子がいた。

そう、見間違える訳が無い！！

僕が“なのは”を!!

見間違える訳が無い!!

(!?! 不味い!! 此の俣回避したらなのはに当たる!?! シー
ルドの術式を組む時間が今の僕の技量ではひねり出せない!! サ
イブレードの出力を上げて射線をそらすにも精神力と魔力が両方と
も不足している!! バインドも間に合わない!! こうなったら
!! 僕が移動して射線をなのはから逸らす!! 駄目だ!! も
う発射体勢だ!! 間に合わない!!)

僕の思考は高速回転しながらある一つの論点に行き着く。

僕はフェイトに背を向け、全魔力を高速飛行に費やしたのはの元に
急降下した。

迫り来る金色の砲撃。

僕となのはの距離は10メートル。

僕とプラズマスマッシャーとの距離は15メートル。

圧倒的に速いプラズマスマッシャー。

だけど、

そう! だけど!!

この身は“高町　なのは”の盾であり剣！！

諦めると言う事はその存在意義を否定する事！！

其れだけは……

死んでもあり得ない！！

自分の持てる魔力を捻り出すユーノ。

なのはとの距離5メートル。

倦怠感が体を襲う。

（そんなの無視だ！！）

4メートル、

倦怠感は疲労へと変換される。

（知るものか！！）

3メートル、

疲労は更に酷くなる。

（いい加減、五月蠅いぞ！！）

2メートル、

疲労は苦痛へと変換される。

（なのはを助けられないほうが苦痛だ！！）

1メートル、

僕は左足を突き出し、地面を蹴り上げる。

土の地面はひび割れ、クレーターを作る。

ユーノの左足は鈍い音を立て、皮膚から夥しい血があふれる。

（ツァー！？）

叫びたい衝動を必死に押さえつけ体をなのはの方に向ける。

その時、身体強化に耐えられなかった左足の筋肉が切れる音をユーノは聞いた。

（だから五月蠅いぞ！！　僕の体！！　コレくらいで悲鳴を上げるな！！）

心で叫びながらユーノは右足に残りの全魔力を集中し、地面を蹴る。

地面は爆ぜる様に土煙をあげ、ユーノの後ろを白く染める。

なのはとプラズマスマッシャーとの距離5メートル。

（間に合え！！ いや！！ 間に合わせる！！ 意地でも、死んでも間に合わせる！！）

ユーノはなのはを抱きかかえ、その場を飛びのく。

右足の回避が遅れ、プラズマスマッシャーが右足に当たる。

強烈な痛みがユーノの右足を襲う。

（ウグッ！！）

叫びが口から漏れそうになるのを歯を食い縛り耐える。

そして、爆心地から離れる様に低空飛行し、なのはを優しく地面に降ろす。

そして、僕はフェイトの方を見ると既に撤退していた。

ジェエルシードは既に奪われ、アルフのバインドも解術され取り逃がし。

結果だけを見れば僕の敗北。

でも、なのはを守れた事は僕にとって、何物にも変え難い大勝利。

そう思いながらなのはの方に振り向く。

月に照らされるなのは顔は驚きと困惑が入り混じった顔……

ああ……守れた……僕はそう思いながら意識を手放した。

なのはサイド

私は一度死んでいる……

ユーノくんと結婚式の当日、ブーケトスをする時、私は死んだ。

今でも覚えてる……

血染めの私、

私を抱きかかえるユーノくん、

泣き継るヴィヴィオ、

騒然とする周り、

私の最後の言葉はちゃんと言葉にならなかった……

『泣かないで……ユーノくん……』

そして、目が覚めると私は高町家のベッドの上で5歳で、パジャマ姿で、寝ていた……

私は弾かれる様に飛び起きた。

そして、鏡を見た時、私は愕然とした。

そして、泣いた……

人生で一番泣いた……

其れからは過去の記憶の焼き回しの日々が続いた。

確かに苦痛だったかもしれない……

でも、私の心には何時もユーノくんがいて、

私を支え続けた。

そして、今晚、私は自分の運命とであつた……

9歳のユーノくんと……

突然倒れたユーノくんはフェレットさんになった。

そうココからわたしとユーノくんの新たな運命の扉が開かれた。

リリカルなのは 過去と今と未来と 2話

ユーノ君はフェレットになって地面に倒れた。

私は慌てて駆け寄り、首元に手を優しく添える。

（よかった！！ 生きてる！！）

私は慌てて、ユーノ君の傍に落ちてる赤い宝石、レイジングハートを拾い上げる。

『な！？ 何ですか！？ 彼方はいたい！？』

レイジングハートは慌てた様に語りかけてきた。

『落ち着け、レイジングハート。時間が無い。御身は高町 なのは殿ですか？』

今度は懐中時計が語りかけてきた。

「え、あ、ハイ……あの……彼方は……」

懐中時計は私の言葉を遮る。

『今は悠長な説明をしている場合では無い！！ 早くレイジングハ

ートと契約を!!」

懐中時計はそう言い、レイジングハートにも言う。

『レイジングハート、マスターの命がかかっている!! 彼女と急いで契約を!!』

レイジングハートは慌てて契約の準備を始めた。

「大丈夫だよ……レイジングハート……“解る”から……」

なのはは静かにレイジングハートに語りかけ瞳を瞑りながら、両手を胸元で組み、祈るように、契約の呪文を唱えた。

その姿は神に祈る様な美しい姿だった。

「我、使命を受けし者なり

契約の下、その力を解き放て

風は空に、星は天に

そして、不屈の心はこの胸に

この手に魔法を

レイジングハート、セット・アップ!」

『stand by ready. set up.』

彼女達の契約はココに……

不屈の魂と輝ける星は再び主従となった。

『な！？ マスターとレイジングハートとの契約の上から強引に上書きした！？ しかも何だ！？ この魔力量！？ 人の身でこの魔力量！？ ええい！！ 高町 なのははバケモノか！？』

懐中時計が何か失礼極まりない事言ってる……

私、バケモノじゃないもん！！

『コレがマスターから聞き及んだ管理局のしろ……』

「それ以上言うとか命はないの。断じて私は魔砲少女でも白い悪魔でも冥王でも無いの……

ワカタ……」

私は懐中時計にレイジングハートを突きつけながら笑顔で語りかけた。

『……理解した……理解したから杖を逸らして欲しいのだが……』

懐中時計が認識を改めてくれた様だ。

（やはり、マスターの記憶は本物だったか……何て恐ろしさだ……杖から殺気が全力全開だった……本当に9歳児か!？）

「……今、失礼な事考えなかった？」

『いや何も……』

何か懐中時計が失礼な事考えて様な気がしたからきいてみたの。

『兎に角!! マスターを助けてくれ!! 今から回復の呪文を教えるから!!』

そうだった!! ユーノ君が危ない!!

私は懐中時計から教わった回復の術式を構成していく。

（ユーノ君! ユーノ君! ユーノ君! ユーノ君!
ユーノ君! ユーノ君! ユーノ君! ユーノ君!
ユーノ君! ユーノ君! ユーノ君! ユーノ君!
ユーノ君! ユーノ君! ユーノ君! ユーノ君!
ユーノ君! ユーノ君! ユーノ君! ユーノ君!
ユーノ君! ユーノ君! ユーノ君! ユーノ君!
ユーノ君! ユーノ君! ユーノ君! ユーノ君!
ユーノ君! ユーノ君! ユーノ君! ユーノ君!
ユーノ君! ユーノ君! ユーノ君! ユーノ君!
ユーノ君! ユーノ君! ユーノ君! ユーノ君!）

私はユーノ君の想いを全力全開で込めた。

私とユーノ君のロマンティックがとまらないの!!

スターゲイザーサイド

な……何だこの術式!?

全てがマスターで埋め尽くされている!?

しかも出鱈目な術式のはずなのにマスターの怪我が見る見るうちに消えていくだ!?

最早、回復の域を超越して蘇生だ!?

本当に高町　なのははバケモノか!?

魔力量も既に可笑しい。

明らかに本人の魔力量を超越している!!

なのは……恐ろしい子!!

『これは……何と……』

私はとりあえずそう呟く事にした。

ユーノサイド

あるれ~~~~~?

何で僕、怪我也魔力も回復してるの？

「ユ~~~~~ノ~~~~~ん!!」

なのはが全力全開で抱きついてきた。

は？ 今、なのは何て言った？

ユーノ君といった？

フェレットな僕に？

はあああああああああああああああ!!?

何で!?

って!! 苦しい!! なのは!! 苦しい!! フェレットのま
まだから抱きしめる圧力が半端無いよ!! なのは!!

そして僕は泡を吹いて気絶した。

「と、言うのがなのはとの最初の出会いかな」

ユーノはアルフと無限書庫でお茶を楽しみながらなのはとの出会いを語った。

勿論、自分達が過去から未来から転生した事は伏せ、虚実織り交ぜながらの会話ではあるが……

「相変わらずおもしろいな、2人の馴れ初めは」

アルフはゲラゲラ笑いながら言う。

僕はスターゲイザーを取り出し、時間を見る。

「アルフ、そろそろ仕事の時間だ。クロノの依頼は片付けたけど他の依頼はまだなんだから」

アルフはソファアから飛び降り、ユーノの後をついていく。

「ハイ」

（なのは、元気にしてるかな？）

ユーノ・T・スクライアはそう思いながら仕事に入った。

なのはサイド

アレから結構、時間が過ぎました。

今は、はやてちゃんが立ち上げた六課でフォアードの子達を訓練しています。

「皆々！ 休憩に入ろうか！！」

4人共バテバテになりながら答える。

「」「ハイ！！」「」

空元氣でもコレぐらい大きな声が出れば十分！

私、ナノハ・T・スクライアは微笑みながらフォアードの子達を見つめた。

ユーノが無限書庫司書長室でアルフと仕事をしていると通信が入る。

その通信を見た時、辺りから警報が鳴り響く。

『クロノ注意報発令！！ クロノ注意報発令！！ 警報に発展する恐れあり！！ 繰り返し！！……』

“ヤツ”は最早、無限書庫では災害扱いである。

耳を済ませると……

『ぎやああああああああああああああああああああ！
俺の休みが！！』

とか……

『今日は彼女とのデートなのに~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~
~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~！！』

とか……

『もう、徹夜いや~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~！！  
まともな食事と睡眠がしたい！！』

やら……

『あへへへへへへへへへへへ………！！』

とか……

最早、地獄絵図である……

ユーノは溜息を吐きながら警報を解除する様、命じクロノの通信に出る。

『よう、フェレットモドキ、元気か？』

相変わらずのふてぶてしさにユーノは溜息を吐きながら答える。



「またかいクロノ……前みたいに無限書庫を1ヶ月使用不能に追い込む気かい？　今度は査問会と減俸処分じゃ済まないよ？」

『グッ……アレは仕方が無かった……あの資料が無ければ次元世界への影響が凄まじい事に……』

そう、クロノは一時期無限書庫のキャパシティーを超える過剰な資料請求をした事があった。

クロノの言葉も事実でユーノ達、無限書庫の活躍が無ければあの事件は最悪の結末になっていただろう。

しかし、その後の弊害が酷かった。

その資料請求でユーノとアルフ以外はぶっ倒れ、無限書庫は機能不全に陥り、管理局の機能は50%の低下、つまり以前、ユーノが司書長をする前に戻ってしまい、管理局全体に影響を及ぼした。海、陸問わずその機能低下は深刻だった。

コレに慌てた管理局は慌ててユーノが進言した人事案を全面的に支持する方向に傾いた。

更にユーノを驚かせたのは、無限書庫司書長の地位を一部署の長から元帥相当の地位に当たる『大臣』の地位を作り、其れをユーノに与えた。

ある意味75年間、情報を軽視していた管理局が情報の重要性を認識した事件となった。

そのある意味で立役者たるクロノは形だけの査問会と減俸5ヶ月が言い渡されただけに留まった。

何故なら、上層部も情報の重要性をこの事件で認識させられた為、クロノだけを責められなかった。

兎に角、ユーノはクロノの用件を聞くことにした。

「で、今度はなに？」

『ああ、今回は今から送る書類を六課に届けて欲しい。勿論、それ以外は自由に行っている』

ユーノはクロノの遠まわしの優しさを察したが困った様に呟く。

「でもね……僕がココを抜けたら……」

「いいじゃん、ユーノ。たまには休んできなよ。最近働き尽くめだろ？ ガス抜きは必要さ。それに、なのはに会いたい頃だろ？ それにいい加減、他の司書も鍛えたいしさ」

アルフの言葉に押される形でユーノは依頼を受理した。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9837n/>

---

リリカルなのは 過去と今と未来と

2010年10月12日06時27分発行